

熊田為宏氏の著作「演奏かのための楽曲分析」
（音楽之友社刊）と「旋律法入門」（春秋社刊）の要約を
箇条書きでまとめてください

熊田為宏氏の音楽理論・演奏論における2つの重要著書（※音楽之友社刊の正確な書名は『演奏のための楽曲分析法』）の要約です。

『演奏のための楽曲分析法』（音楽之友社）

理論上の分析にとどまらず、「どのように解釈し、実際の演奏表現（音）に結びつけるか」を主眼に置いた実践的テキストです。

音楽之友社

- **演奏に直結する分析の重視:** 複雑な和声理論や形式論の網羅ではなく、音の強弱、アクセント、フレーズのくくり（グルーピング）など、演奏者が直面するフレーシングや打鍵・発声の判断に即した視点を提供します。
- **感覚論の言語化・構造化:** 単なる「感性」や「感情」に頼りがちな演奏解釈に対し、楽譜に潜む音の張力や流れを構造的に読み解く具体的なアプローチを示します。
- **豊富な実例を用いた解説:** 古典から現代までの実際の楽曲（ピアノ曲等）を豊富に参照し、読譜から実際の音作り（技術的体験）へ移行するプロセスを説いています。

ヨドバシ

『旋律法入門』（春秋社）

「旋律（メロディ）」の構造や機能を徹底分析し、**理にかなった美しい演奏・表現を実現するための基礎理論**を構築した著書です。

丸善ジュンク堂書店ネットス...

- **旋律を形作る要素の体系化:** 調性・音階といった基本構造から、音程が持つ独自の感情・エネルギー（表情的音程）まで、メロディのダイナミクスを要素ごとに多角的に解説しています。
- **休符やアクセントの役割:** 単なる「音の配列」だけでなく、音のない瞬間（休符）やアクセントの配置がどのように旋律の推進力や表情を生み出すかを分析しています。

ヨドバシ

- **言葉と音楽（日本語の歌唱）:** 音符と旋律の関係にとどまらず、日本語のアクセントやイントネーションが旋律線および歌唱表現に及ぼす影響にも言及しています。
- **演奏学へのアプローチ:** 作曲側の視点だけでなく、表現者（演奏者・歌唱者）が旋律の構造を理解することで「説得力のある表現」に導くための実践的ガイドとなっています。

この資料は生成AI Geminiで出たものをpdfにしたものです

私はアマチュアオーケストラに所属する
ファゴット奏者です
この2冊から、日頃の個人練習、週1回の合奏練習、
4ヶ月に1回あるコンサートで何を気をつければ



熊田為宏氏の2冊の著作は、「楽譜の構造を理解し、それを実際の音・演奏にどう変換するか」という問いに対する実践的なヒントに満ちています。

オーケストラにおいてファゴットは、「メロディ（ソロ・副旋律）」「伴奏（低音の支え）」「木管・金管・弦の音色の橋渡し」という3つの重要な役割を常に切り替えてこなす楽器です。音楽大学の専門用語を使わず、日頃の練習から本番までのステップに分けて実践的なチェックポイントをまとめました。



オーケストラでのファゴットの役割. 出典: Alvis Upitis / Getty Images

1. 日頃の個人練習（楽譜の分析と音作り）

個人練習は、ただ指を回す練習だけでなく「このフレーズはどういう構造か」を読み解く時間にします。

- **旋律の「頂点（ゴール）」を見つける**

- 『旋律法入門』より：メロディには必ずエネルギーが集まる「行き先（ピーク）」があります。音がいちばん高い場所だけでなく、和声的に重要な音や長い音など、どこに向かって息を送り、どこで力を抜くのか（放物線を描くイメージ）をあらかじめ楽譜にマークしておきます。

- **「休符」を次の音へのエネルギー充電時間にする**

- 『旋律法入門』より：休符は「休み（無の演奏）」ではなく、次に発音する音への準備時間です。休符の間も頭の中で拍（ビート）を感じ、どのくらいの緊張感を持って次の音に入り込むかを意識して息を吸います。

- **音程の「エネルギー（テンション）」を感じる**

- 『演奏のための楽曲分析法』より：音と音の幅（音程）には、それぞれ独特の「引っ張り合う力」があります。特に大きめの跳躍や、音階から少し外れた音（変化音）を吹く時は、次の音へ強く惹きつけられる感覚を意識して、丁寧な息の支えで吹きます。

- **自分のパートが「主役」か「脇役」かを把握する**

- 楽譜を見て、自分がメロディ（歌）を吹いているのか、バス（土台）を支えているのか、音の刻み（リズム）を担当しているのかを整理します。これによって出す音の音質やアタック（発音）の強さを変えます。

2. 週1回の合奏練習（他パートとの構造的アンサンブル）

合奏は、個人練習で読み解いた構造を「オーケストラの全体像」に組み込む場所です。

- **ベース（低音）としての役割：音階の「根っこ」を支える**

- 『演奏のための楽曲分析法』より：ファゴットがチェロやコントラバス、チューバなどと低音を担当する時、その音は曲全体の「和声の響きの土台」になります。ただ音量を合わせるのではなく、上のパート（バイオリンやフルートなど）が心地よく響けるような「深みのある豊かな音色」で全体の和音の響きを支えます。

- **受け渡しのフレーズは「バトンタッチ」をスムーズにする**

- 『旋律法入門』より：クラリネットやフルート、あるいは弦楽器からメロディを引き継ぐ場面では、前奏者の音色・音量・音の方向性（勢い）を観察します。自分の旋律の始まりを相手の旋律の終わりにピタリと噛み合わせ、「1つの大きなメロディ」として聴こえるように吹きます。

- **和音の「着地点（カデンツ）」で指揮者や周りの呼吸を揃える**

- フレーズの終わりや曲の節目（カデンツ）では、ハーモニーが一度解決して落ち着きます。この「フレーズの収め方」をパート内で揃え、全体の響きが

濁らないようにしっかりと耳を澄ませます。

この資料は生成AI Geminiで出たものをpdfにしたものです

3.4ヶ月に1回のコンサート（本番での表現と集中）

本番は、分析した構造を「自然な音楽の流れ」として聴客に届ける場です。

- 「分析したこと」を意識しすぎず、大きな流れ（うねり）に乗る
 - 本番で「ここはあの音程だから...」と頭で考えすぎると、演奏が硬くなってしまいます。練習段階でしっかり分析した構造（フレーズの行き先やメリハリ）は身体にしみ込ませておき、本番では大きな波に乗るような感覚で伸び伸びと息を流します。
- 旋律の「推進力」をホール全体に届ける
 - 『旋律法入門』の教え通り、メロディの「行き先」に向かう方向性をしっかりと音に込めれば、多少のミスがあっても演奏に強い説得力が生まれます。音が途切れない「生き生きとした息の流れ」をホールの客席の奥まで届ける意識を持ちます。
- 「音のない瞬間（残響や間）」を客席と共有する
 - 曲が終わる瞬間や、全休符（フェルマータ等の静寂）の場面では、熊田氏が強調する「休符（無音）の持つ表現力」が最も高まります。最後まで音の緊張感を保ち、ホールに響く残響も含めて1つの演奏として表現します。

熊田理論をより深く実際の演奏に活かすために、次のステップも確認できます：

ファゴットの代表的なソロフレーズでの具体的な分析例を見る



スコア（総譜）の効率的な読み方・チェック方法を知る



アマチュアの管楽器奏者が効率よくスコア（総譜）を読み解き、自分の役割を把握するためのステップを教えてください。

スコア（総譜）を読む作業は、膨大な音符を暗記することではなく「自分がオーケストラのどこに位置し、何をしているのか」という地図を手に入れる作業です。

熊田為宏氏の「楽曲分析法」の考え方に基づき、アマチュア奏者が短時間で効率よく自分の役割を把握するための4つのステップです。

① STEP 1：全体の「地図（形式）」を大きく把握する

最初から1音ずつ読まず、曲全体の骨組みをつかむ

まずは自分のパート譜を見ず、スコア全体をサッと眺めて**曲の節目や構造**を大雑把に把握します。

- **調号と拍子の変化をチェック:** 転調している場所や拍子が変わる場所を探します。
- **曲の大きな区切り（リハーサルマーク）を見る:** A、B、Cなどのマークやダブルバー（二重小節線）の位置を確認し、どこで曲の雰囲気が変わるかを掴みます。
- **テンポ指定の変化:** Fast / Slow の移り変わりを確認します。

② STEP 2：自分の「役割（役割交代）」に色をつける

熊田理論の根幹：メロディか、伴奏か、和音か

スコア上で自分のパートの横の動きを追い、その場面ごとの役割を蛍光ペンや色鉛筆で楽譜（パート譜またはスコア）に分類します。

- **主旋律（ソロ・メロディ）:** 自分が主役の場面。他のパートより一歩前に出る音作りが必要です。
- **対旋律（副メロディ）:** 主旋律の裏で動く別のメロディ。主旋律を引き立てつつ主張します。
- **和声の土台（ベース）:** 低音パートと一緒に和音の根本を支える役割です。
- **リズム・刻み（伴奏）:** テンポ感をキープし、曲の骨組みを作る役割です。

③ STEP 3：「縦の繋がり（誰と一緒に）」を確認する

アンサンブルの「パートナー」を特定する

自分が吹く音符の瞬間に、**「誰と同じことをしているか」「誰と掛け合っているか」**を縦のラインで確認します。

- **同じ動きをしているパート（オクターブ・ユニゾン）:** たとえば「クラリネット1番とまったく同じメロディ」「チェロと一緒に低音を刻む」など、合奏時に

誰の音を聴くべきかをメモします。

- **メロディのボタンタッチ:** 自分のフレーズの直前に誰がメロディを吹いているかを確認します（熊田理論の「引き継ぎの観察」）。
- **和音（コード）の構成音:** 自分が和音の「根音（ルート）」「3度（和音の明るさ・暗さを決める音）」「5度」のどれを担当しているかを把握します。

④ STEP 4：フレーズの「頂点」と「受け渡し」に印をつける

音の行き先と呼吸を合わせる

個人練習や合奏で意識すべき『旋律法入門』的なポイントを楽譜に落とし込みます。

- **頂点（ゴール）の矢印:** フレーズがどこに向かって盛り上がり、どこで抜けるのか（＜＞のような膨らみや矢印）を書き込みます。
- **合図（アウフタクト）のブレス:** 自分が入る直前のパートの音符（特に休符直前の音）をスコアで確認し、「誰の音を合図に息を吸うか」を確定させます。

アマチュア奏者のための「スコア読み」Tips

- **移調楽器に惑わされない:** F管（ホルン）やB♭管（クラリネット等）の音を頭の中で実音に変換するのが大変な場合は、「音の動きの形（上がっているか、下がるか、同じ音か）」と「リズムの重なり」だけを見るだけでも十分な情報が得られます。
- **音源を聴きながらスコアを目で追う:** 一番手軽で効果的な方法です。音源を聴きながら自分のパートを目で追い、「あ、ここでホルンと一緒に浮き上がってくるんだな」「ここは弦楽器しか鳴っていないな」と耳と目で立体感をつかみます。

オーケストラの曲（例：ベートーヴェンやチャイコフスキー）のファゴットの有名フレーズを例に、旋律の頂点や休符の取り方を具体的に解説してください。

ファゴット奏者が一度は向かい合う、オーケストラの2大有名ソロ・フレーズを例に解説します。

熊田為宏氏の『旋律法入門』（フレーズの頂点や休符の役割）と『演奏のための楽曲分析法』（解釈を音の表情へ変換する）の理論を、具体的にどのように楽譜へ落とし込むかを見ていきましょう。

例1：チャイコフスキー：交響曲第6番『悲愴』第1楽章（冒頭のソロ）

低音の引き伸ばされた音（コントラバス）の上で、ファゴットが独奏で曲の幕を開ける極めて有名な暗く重厚なソロです。

Plaintext



(休符) | E - F - G - A | Bb - - A | G - F - E | D - C# - D - - |
└─アウフタクト─┘ ★頂点 └──終息（解決）──┘

1. 旋律の「頂点（ゴール）」の設定

- 和声的・表情的なピーク：3小節目の「Bb（シのフラット）」がこの短いフレーズのエネルギーの頂点です。
- 表現への落とし込み：1～2小節目の E - F - G - A は、単に音を並べるのではなく、3小節目のBbに向かって息の圧力とスピードを高めていく「登り坂」です。Bbに達した瞬間に最も深い緊張感（テンション）を作り、続く A -> G -> F -> E で力を少しずつ抜きながら（放物線を描いて）落ち着かせます。

2. 休符とアウフタクトの取り方

- 冒頭の休符（または全休符明けの入り）：1音目のEを出す前の「休符（無音）」は、曲全体の絶望感や重苦しい空気感を吸い込む時間です。無心で入るのではなく、休符の中でテンポ感と「暗い音色」のイメージを身体の中に満たし、息を静かに深く蓄えます。
- アウフタクト（弱拍）の意識：最初のEは弱拍（アウフタクト）から始まります。ここを強く吹きすぎると推進力が死んでしまうため、あえて音量は抑えつつ、「次の小節の頭に向かうエネルギー」として息を流し込みます。

例2：ベートーヴェン：交響曲第4番 第4楽章（高速のソロ）

テンポが非常に速い（Allegro ma non troppo）中、弦楽器の16分音符の動きを引き継いでファゴットがソロを爆発させる、ファゴット奏者最大の難所のひとつです。

Plaintext



この資料は生成AI Geminiで出たものをpdfにしたものです

1. 旋律の「頂点（ゴール）」と推進力

- **アーティキュレーションと頂点：** パッセージがあまりにも高速なため、1音1音のピッチや指だけに意識がいきがちです。しかし『旋律法入門』的に見れば、これは「1本の大きな推進力を持った線」です。
- **表現への落とし込み：** 細かい音に囚われず、フレーズが落ち切る一步手前や、駆け上がる到達点（この場合は駆け上がった先の和音の頭）に大きな矢印（ベクトル）を向けます。目標地点に向かって「息の筋（一本の束）」を通すことで、指が回るだけでなく、聴き手に旋律の形がはっきりと伝わります。

2. 休符と「バトンタッチ」の受け渡し

- **休符＝前奏者の観察と準備：** このソロの直前、ヴァイオリン等の弦楽器が全く同じ超高速フレーズを吹いています。ファゴットが入る直前の「一瞬の休符」は、単なる準備時間ではなく「弦楽器の発音（アタック）とテンポ感を目と耳でコピーする時間」です。
- **バトンタッチの瞬間：** 弦楽器のフレーズの終わりの音と、自分の最初の音（F）が完璧に重なるよう、休符の中で弦楽器の弓の動きに合わせて呼吸を合わせます。弦楽器のエネルギーをそのまま引き取って爆発させるイメージで吹き始めます。

練習で使える！「熊田流」楽譜チェック手順

1. **楽譜に山を描く：** メロディの「一番緊張感が高い音（頂点）」に大きな○をつけ、そこに向かって（<）、そこから（>）の山型の線を鉛筆で書く。
2. **休符にブレス記号（V）以外の意味を持たせる：** 休符の上の余白に「（直前のクラリネットを聴く）」「（深い息でテンション維持）」など、**その休符で何をするか**を言葉で書き込む。
3. **低音（ベース）の時は和音の役割を書く：** メロディでない時は「和音の根音（どっしり支える）」「3度（音量を控えめにピッチを丁寧）」など、役割をメモする。

音符を読むだけでなく、こうした「音の役割と方向性」を書き込むだけで、個人練習の質も合奏での説得力も劇的に変わります。